

リハビリ職から見た介護職の魅力と課題

鶴 和也¹, 吉村 浩美²

(医療法人浜江堂 介護老人保健施設ささぐり浜江苑¹,
西九州大学短期大学部 地域生活支援学科²)

(平成 31 年 1 月 7 日受理)

Attractiveness and Challenges of Nursing Care Workers as seen From Rehabilitation Workers

Kazuya TSURU¹, Hiromi YOSHIMURA²

(*Minkodo Sasaguri Minkoen*¹,
*Department of Local Life Support Sciences, Nishikyushu University Junior College*²)

(Accepted January 7, 2019)

Abstract

Elderly people are increasing, and elderly people who need care are also increasing. On the other hand, at the nursing care site, shortage of human resources is normalized. Under such circumstances, in order to provide high-quality and stable care services, cooperation among care workers and collaboration with other occupations are necessary. I have experienced both care and rehabilitation work and I thought that collaboration is particularly important from the experience of care worker and rehabilitation worker. Therefore, in this study, I conducted an interview survey for those who experienced care workers and rehabilitation workers. In the interview, I asked about the chance of career change and the attractiveness and challenges of care workers.

Three adult men who understand the purpose of the study and gained consent of participation, the subjects are converting from nursing care to rehabilitation work. We conducted a semi-structured interview with each subject about 1 hour and analyzed the content of interview using qualitative research method. As a result, attractiveness of nursing care workers and narratives about technical issues were obtained. In order to make full use of the attractiveness of nursing care workers and to compensate for issues, I thought that cooperation with other types of work and improvement of communication skills of each staff for cooperation are necessary.

Key words : Rehabilitation staff リハビリ職
Charm Care workerhe 介護職
Charm 魅力
Task 課題

I. 結 言

本邦の65歳以上の人口は3515万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）も27.7%となった¹⁾。高齢者の増加とともに介護が必要となる高齢者も増加傾向にある。介護保険制度における要介護又は要支援の認定を受けた人は平成26年度末で598.1万人であり、平成15年度末から221.4万人増加している²⁾。そのような中、高齢者の生活支援を担う中心的な存在である介護職の役割は大変重要である。しかし、介護現場では人材不足が常態化しており、それに伴い介護サービスの質の低下も懸念されている。吉田は、適切な介護がなされるかどうかによって、介護を受ける人にとってのQOLを大きく左右するのみならず生命や生命を支える「命に関わる」仕事であると述べている³⁾。つまり、介護サービスの質の低下は介護サービスを利用する高齢者の命に直接関わるといっても過言ではない。それほどに、高齢化社会において介護職員の担う役割や責任は大きいと言える。

介護職員の人材不足に関しては、介護労働安定センター等による大々的な実態調査も実施されており、原因の調査と対策立案が急がれている⁴⁾。このように介護職の人材不足や離職率に関する研究は多くみられる。確かにそういった根本的な解決につながる知見も必要であるが介護サービスは今まさに利用している方にとっては現状のなかでいかに上質なサービスを受けられるかが重要な問題である。介護の質に関する制度・施策が強化されていく一方、介護現場による介護の質に関する研究は決して多くはない。

筆者自身、介護職としての現場での経験をもっている。その際、介護サービスの利用者に対して納得のいくアプローチが出来ず、介護技術や医療的な知識の圧倒的な不足を感じた。介護方法に根拠がなく「なんとなく」で介護をしており、介護の質についてまで考えることができていなかった。そのような経験を経て、より具体的な知識・技術を得るためリハビリ職への転職に至った。介護職とリハビリ職の双方を経験した上で、生活を支援する介護職と生活の改善を目指すリハビリ職は協力できる部分が多いと感じた。介護職は、リハビリ職と比較してより生活に根ざした支援方法等を学んでいる。一方、リハビリ職は介護職と比較して評価方法や身体構造・疾患に対する知識等をより多く学んでいる。介護の質向上のためには、そういった互いの専門知識及び技術を共有し、介護職とリハビリ職が互いに協力していくことが大変重要であると考えた。

そこで、本研究では介護職とリハビリ職両方を経験した人材を対象とし、インタビュー調査を行った。今回は介護職からリハビリ職に転向した3名のインタビューを通し、介護職からリハビリ職へと至ったきっかけとなっ

た課題や介護職としての経験を改めて振り返った時に感じた介護職の魅力や課題について、語りの中から検証することを目的とした。

II. 方 法

1. 対 象

研究の趣旨および目的を口頭にて説明し、研究協力の同意を得られた成人男性3名を対象とした。この3名は介護職の経験を経て、現在リハビリ職として勤務あるいはリハビリテーション養成校に在学している。以下に各対象者の略歴を示した。

A氏は20代男性。介護職員として有料老人ホームに3年間勤務している（現在も在職）。介護職員として勤務していく中で、他介護職員との人間関係や自分が正しいと思う事が出来ないもどかしさから理学療法士（PT）養成校に進学した。現在、リハビリテーション養成校に進学して2年が経過している。

B氏は40代男性。介護職員としてデイケア（DC）に7年間勤務していた。介護職員として勤務するなかで「もっと利用者に元気になってほしい」「もっと工夫すれば、利用者の出来ることが増えるのではないか」との思いに至りOTへの転職へと至った。OTとしては病院に5年間、デイサービス（DS）に4.5年間、現在は老人保健施設に勤務している。

C氏は30代男性。介護職員としてグループホーム（GH）に6年間勤務していた。その中で給料面や勤務形態に不安があったこと、もともと精神分野に興味があったことからOTへの転職へと至った。OTとして回復期病棟にて勤務し7年が経過している。

2. 面 接

A氏・B氏・C氏それぞれに対し、半構造化面接を実施した。その際、面接を円滑に進めるための補助ツールとして質問内容を事前に準備した面接ガイドを用いた⁵⁾。半構造化面接のなかで各対象者に介護職の魅力や課題について語ってもらった。同意を得た上でICレコーダーにその内容を録音し、音声データ化した。面接時間は一人あたり1時間程度で、対象者の語りが飽和状態になったと筆者が判断した時点で終了とした。

3. 記述データの生成と分析

データ分析は、人間に焦点を当て、その現象の本質を明らかにするために質的研究手法を用いた⁵⁾。

はじめに対象者3名に対する面接の音声データをもとに逐語録を作成した。この逐語録を「A氏・B氏・C氏の思い」または「出来事」を最小単位として区分化し「区分データ」とした。次いで各区分データの中で語られた

各対象者の思いや出来事を1つの短文に凝縮して表現し「語りのエッセンス」と名づけた。この「語りのエッセンス」を内容の類似性に従ってカテゴリー化し（語りの一次カテゴリー）、それぞれに表題をつけた。さらにその一次カテゴリーを同様の手続きで分類して二次カテゴリーを導き、それぞれに表題をつけた。

こうして得られた語りの一次、二次カテゴリーを手がかりに、各対象者が介護職・リハビリ職の両方を経験するなかで感じた介護職の魅力や課題について、介護職勤務時からリハビリ職への進学・転職に至る時間の流れに沿って要約した。

4. 倫理的配慮

対象者には、研究協力への有無において対象者に不利益を被らないこと、データを研究以外に使用しない事、プライバシーの保護について口頭で説明を行い、同意を得た。

Ⅲ. 結 果

A氏との面接は通算1回、1時間02分であった。

転記された記述データを「A氏の思い」または「出来事」によって分断して得た区分の数は170であった。各区分の内容を凝縮して得た、語りの一次カテゴリー数は19、語りの二次カテゴリーは17となった。

B氏との面接は通算1回、1時間15分であった。

転記された記述データを「B氏の思い」または「出来事」によって分断して得た区分の数は84であった。各区分の内容を凝縮して得た語りの一次カテゴリー数は25、語りの二次カテゴリーは25となった。

C氏との面接は通算1回、1時間26分であった。

転記された記述データを「Cの思い」または「出来事」によって分断して得た区分の数は182であった。各区分の内容を凝縮して得た語りの一次カテゴリー数は21、語りの二次カテゴリーは20となった。

それぞれの語りを『介護職の魅力』『介護職の課題』『介護職とリハビリ職の連携』の3つのカテゴリーに分類し、それぞれの語りを集約した。

1. 介護職・リハビリ職勤務に関する語り

1) 介護職の魅力

介護職の魅力については「介護職の魅力は、人柄の良さや患者との接し方」、「介護士の頃は素直に利用者本人を見れた」、「介護の魅力は患者との距離が近いこと、身近な話題を引きだしやすいこと」という、介護職には人柄が良い人が多く、患者に対する目線の合わせ方や態度等、コミュニケーションの面で介護職の魅力を感じることが解った。また「医療職は治すという観点で患者

を否定することがある」という医療職の課題も感じることが明らかになった。

2) 介護職の課題

介護職の課題については、「介護職は、もっと具体的な介助方法や動作の理解を身に付ける必要がある」という技術的なことで課題を感じていることが解った。また、「移乗にしても介護とリハビリで習っていることが違う」、「短大の頃に学んだりリハビリの知識は現場では使えない」という単に個人の技術の問題だけでなく、学習過程での問題も含んでいることが明らかになった。

「介護職は、働く先で柔軟に対応してほしい」という、働く先での理念や目的に順応に対応できていない現状があることに課題を感じていることが解った。

3) 介護職とリハビリ職の連携

介護職とリハビリ職の連携については、「生活を見る介護職と生活を改善するリハビリ職は1番連携が取れると思う」という希望を見いだしながらも、「医療職は介護職を下に見る傾向がある」「申し送りは、個人により温度差がある」、「リハビリに対する理解は個人により温度差がある」という、連携の障壁となる問題があると感じていることが解った。また、その解決策として、また「リハビリと介護職は現場レベルで密に関わった方がいい」、「リハビリは、専門的な知識を具体的に噛み砕いて介護職に伝えた方がいい」、「リハビリは、実際の現場で介護士に介助方法を体験してもらった方がいい」という現場レベルの工夫や「学生の頃から介護職とリハビリ職が関わる機会を持てば、お互いの職種が理解できると思う」や「お互いの職種を体験することで、お互いに見える部分があると思う」という連携の障壁となる偏見が構築される前の早い段階から、お互いの職種を知る必要性があると感じていることが解った。

また、介護職に限らず「他職種と連携するには、コミュニケーションスキルを磨く必要がある」と感じていることも解った。

Ⅳ. 考 察

本研究では、介護職を経験しながら、リハビリ職へ転職した3名を対象に介護職からリハビリ職への転職に至った経緯をインタビュー形式で聴取しながら、その経過の中で感じた。介護職の魅力や課題、また介護職とリハビリ職の連携について、それぞれの語りの中から明らかにすることを目的とした。

1. 介護職の魅力

「介護職の魅力は、人柄の良さや患者との接し方」と

の語りが抽出された。介護労働実態調査によれば、介護職を選んだ理由の項目では「働きがいのある仕事だと思った」が50.1%、「人や社会の役に立ちたいから」が29.7%と高く、高い意欲をもって介護職に就いたことが解る⁴⁾。また、諸井(1999)は、福祉志向性や労働志向性は、それぞれ個人的達成感の低下や脱人格下の抑制因子として機能すると述べており⁶⁾、語りの中で抽出された「人柄の良さ」は、介護職にとって重要な資質であることが考えられる。

また「介護士の頃は素直に利用者本人を見れた」、「介護の魅力は患者との距離が近いこと、身近な話題を引きだしやすいこと」の語りでは、介護職は利用者が一番近い職種であり、利用者の生活を支援する中心的な存在である。介護職のもつ情報は、他職種協働で利用者を支援していくうえで重要な意味を持つものである。「医療職は治すという観点で患者を否定することがある」との語りでは、植木は、運動指導の専門家が運動プログラムを作成し指導するという従来的に行われてきた手順では、参加者が「やらされている」、「しかたなくやっている」といった受身的な意識を持ちやすい⁷⁾。「介護士の頃は素直に利用者本人を見れた」という介護職の視点も参考にしていすべきであると考えられる。

2. 介護職の課題

「介護職は、もっと具体的な介助方法や動作の理解を身に付ける必要がある」という技術的な面での課題が抽出された。介護労働実態調査による、介護労働条件等の悩み・不安・不満等の項目で、身体的負担が大きい(腰痛や体力に不安がある)が29.9%と決して低くない数値であり、具体的な介助方法を身に付けることが必要であると考えられる⁴⁾。また、介助方法については、身体構造等を専門的に学習しているリハビリ職との連携が必要であると考えられる。

また、「移乗にしても、介護とリハビリで習っていることが違う」、「短大の頃に学んだりリハビリの知識は現場では使えない」という、単に個人の技術の問題だけでなく学習過程での問題も含んでいることが明らかになった。この事から、具体的な介助方法の習得は、現場レベルのみではなく、学習段階から介護職・リハビリ職(介護養成校・リハビリ養成校)の連携が必要ではないかと考えられた。

「介護職は、働く先で柔軟に対応してほしい」という語りでは、介護職の職域は多岐にわたる為、その領域における柔軟な対応が必要であると考えられる。

3. 介護職とリハビリ職の連携

「生活を見る介護職と生活を改善するリハビリ職は1番連携が取れると思う」という語りが抽出された坂梨他

は、リハビリ職は多種多様な障害状況を持つクライアントに対して生活の自立に向けて支援する職種である。それは生活のあらゆる場で行われる活動であり、医療に限定されずに保健・福祉の分野での役割を担っている⁸⁾。生活の自立を目指すには、利用者の生活を中心的に見ている介護職との連携は必須であると考えられる。

また、連携するうえで「医療職は介護職を下に見る傾向がある」、「申し送りは、個人により温度差がある」、「リハビリに対する理解は、個人により温度差がある」という連携するうえでの障壁があることも明らかとなった。蒔田他は、医療の専門職にはそれぞれの文化があり、それは専門的知識と職業的理念とから構成される⁹⁾。専門的立場に偏りすぎると他職種間での葛藤が生じてしまう可能性があると考えられる。この葛藤については、他職種間での葛藤は、それぞれの専門職の文化を基盤とした違和感であることが、お互いに理解されていれば、それを踏まえて支援することにより、新たな価値判断を生み出す契機になる⁹⁾と述べており、他職種とより良く連携していくには「他職種と連携するには、コミュニケーションスキルを磨く必要がある」、「リハビリと介護職は現場レベルで密に関わった方がいい」、「リハビリは、実際の現場で、介護士に介助方法を体験してもらった方がいい」、「リハビリは、専門的な知識を具体的に噛み砕いて、介護職に伝えた方がいい」のように、口頭や紙面のみの連携ではなく、現場レベルでのより密な関わりが必要であると考えられた。

また、「お互いの職種を体験することで、お互いに見えてくる部分があると思う」、「学生の頃から介護職とリハビリ職が関わる機会を持てば、お互いの職種が理解できると思う」という語りに現れているように、偏った専門的知識と職業的理念とが構成される前の段階からの他職種間の理解や関わり工夫が必要であると考えた。

謝辞

本研究のインタビュー調査にお答えいただいた対象者様、ご多忙の中ご協力いただき厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 平成30年版高齢者白書
- 2) 平成29年版高齢者会白書(全体版)
- 3) 吉田直美: 介護職の人材育成に関する一考察, 日本福祉大学経済論集, 第42号(2011)
- 4) 平成29年度「介護労働実態調査」の結果～介護人材の不足感は4年連続増加～公益財団法人, 介護労働安定センター
- 5) Pope, C. and Mays, N. (大滝純司監訳): 質的研究実践ガイド, 医学書院, 18-19(2001)

- 6) 諸井克英:特別養護老人ホーム介護職員におけるバーンアウト, 実験社会心理学研究第 39 巻第 1 巻, 75-85 (1999)
- 7) 植木章三:地域高齢者とともに転倒予防体操を作る活動展開, 日本公衛誌第 53 巻第 2 号, 112-121 (2006)
- 8) 坂梨薫他:専門職の職種, 職位別にみたチーム医療の認識に関する研究, 広島県立保健福祉大学誌, 人間と科学 4 (1), 47-59 (2004)
- 9) 蒔田寛子他:通所リハビリテーション施設における他職種連携の実際と課題- ADL 向上への利用者の希望と支援の実際から他職種連携を検討する -, 豊橋創造大学紀要第 15 号, 167-176 (2011)